

# 扇面散屏風に就いて

田 中 喜 作

嘗てわれ宗達雜考をものして 本誌第二十號 圖版に醍醐寺藏扇面散圖二曲屏風を掲げた。當時其の圖様の因みを追うて、一言同圖屏風の起源に觸るゝところがあつたが、今、足利末期の一珍蹟、元久と讀まる印記ある扇面貼附屏風を掲ぐるに當つて、また少しく此の圖様の由つて來れる源流のいづれにあるかを考へたいと思ふ。

世に通じて扇面散し屏風と云ふもの、或は時に前掲醍醐寺の宗達繪に見らるゝ如く、金地の屏面に扇形を畫して、是れに様々の圖様を繪き、畫者自ら當初より所謂扇面散しなる意匠をもて、一雙の屏風繪の圖を構へたるものあり、また或は本號所掲の元久繪の如く、六曲一雙の屏風に六十面の扇紙をとこせく押して、而も其の扇紙には永徳印を有する一葉の混入を外にして一も摺疊の跡なく、當初より扇子としての用途の爲めに繪かれたりとも見え、寧ろ却つて屏面貼用を目的として多種の圖様を描きたらんかと思はるゝものあり、また或は南禪寺藏六曲八隻の屏風の如く、其の二百四十面の扇紙の大部分に何れも摺疊の跡を印して、元、扇子として使用された

扇面散屏風に就いて

るを改裝して屏面に貼用せるもの等がある。尙、等しく畫者の意匠によりて、當初より此の種の圖様を屏風繪に構ふるものもありても、醍醐寺屏風とは異りて、故らに是れに波形を配して、宛ら水のまにまに扇の流るゝさまに構想せるものがあり、其の一遺例として大倉家にありし同圖屏風 宗達畫集所收 がある。而して是等屏風としての意匠の分るゝところ、若し嚴密に云はゞ、或は醍醐寺屏風は寧ろ是れを畫者の構想より見て、扇盡し繪とも云ふべく、元久繪は或は是れを單に扇面貼附屏風とも云ふべきか。南禪寺の如き摺扇改裝のものにあつては、多くは前者の如く同一畫師の畫扇を貼すること殆んど無く、諸家の多數の古畫扇を貼用せるものとて、或は扇面貼交とも稱すべきであらう。是等二三の名稱は明治以來時に應じて偶然に稱へ來つたもので、今また假りに斯く名づけて強ひて辨別を試みるに過ぎない。而して徳川後半には是れを通じて扇面散し屏風と稱せしか、諸家の鑑定書添狀等多く此の語例を見、また此の種の屏風の盛行せしと思はるゝ足利時代にありては、文獻に屢々扇屏風の名ありて、而

も他に及ばないのを見ると、或は通じて此の名を以て稱したのであらうか。たゞ最後の一遺例の如きに至つては扇盡しに雅びたる一新意匠を加へたるもの、是れこそ古來より扇流し圖を以て呼ぶ。貞丈雜記卷一に

古の屏風の繪に扇ながしといふ事あり、扇ながしと云ふは流水に扇をいく  
らも書きたるなり、扇づくしと云ふは水はなくて扇計いくらも書きたるな  
り、其の扇の面に色々の繪様を書くなり云々

とあるもの、また此の兩圖様を區別せしものである。

然し斯く屏風としての企畫の多種はありながらも、其の扇繪は水墨なると濃彩なると、時の好尚に應じての別はあれ、何れも山水、人物、特に物語繪等に花卉翎毛を巧に按配して變化を求むるに努めて居ることは等しく、是等が同一源流に出づるものであることは言ふを俟たぬであらう。然らば其の源流や如何。

今日傳存する此の種の屏風は、以上に例示せる三四の外最も名あるもの、宗達と傳へらるゝ御物屏風一雙を初め諸家に什襲せらるゝもの多く、尙若し入札目錄等に求めるなら、或は無數とも云はん程其の遺品に接するが、其の大部分は徳川期以後の作品で、以往に上るものは十中一も發見しない。而して漸く足利末期にも上るかと思はるゝ、畫扇を見るものに至つては、或は予が寡見の罪か、僅に上記南禪寺屏風と此の元久繪との二點を見るのみ。嘗て予の洛中洛外圖考<sup>本誌三</sup>十六號をものせるに際して例示した元秀筆洛中洛外圖扇の如き、發見の當初には既に臺張より剝離して、元の體様を明かにしないが、

或は嘗て屏風として貼用されたことがあつたかも知れぬ。是れを加ふるも尙漸く桃山様式を遺すものに過ぎない。而してこゝに云ふ南禪寺藏八隻の屏風は其の中の四隻の、昨秋、帝室博物館屏風繪展觀に陳列されて讀者の記憶にも尙新たなるものあるべく、我が研究所また蚤に全屏の調査撮影を試みたもので、其の多數の畫扇は、元信印を鈐せるものゝ外、畫者を識別し得べきもの十數家、何れも元信以後徳川初期に至る作で、其の元信なるものも果して正筆かと云はば寧ろ疑はしく、概して桃山期を中心とする作と見るべきである。

殊に現存の如く屏風としての體様は、少くとも徳川期に入つて改裝されたと考ふべきで、要するに當時幸に古畫扇が保存されて居たと解し得るに過ぎない。元久に至つては果して何人か。僅に古畫備考に其の印記を擧げて『畫鯉魚圖』と註し、補記本に『扇面墨畫人物、元信に似たり』とあるのみ、其の傳歴を明かにしない。既にこゝに元信様式を認め、また此の入江氏藏屏風に見るも、元信かとも思はるゝ一體の筆作、或は此の先匠の追隨者でもあらうか。殊に此の種の畫體は桃山全期にも尙狩野派中に盛行せるより見れば、此の屏風また當代以前に是れを置くことは難いかも知れぬ。たゞ此の本幸に摺疊の痕なく當初より屏面貼用を目的として描かれたかと思はるだけ、屏風としての體様の稍潮るべきかを想像さるゝのみ。而して徳川期に入つては此の意匠を屏風に畫圖すること頗る多く、宗達或は其の追隨者の好んで筆作せしものか、今日に傳ふる遺品の多きは世の周く知る所、殊に嘗て予が宗達雜考に擧げたる

宗達といふは御影堂の扇の繪かきにて古きものにて上手也、家隆の像を畫きたるが松花堂の讚あり、土佐風より出でたる風也、いかさまにも扇の繪など見るに土佐の流れと見ゆ

なる蘿月菴國書漫抄の宗達扇面畫工説すら出づるに至つた此の説素より無下に否定し去るべきでもない。殊に彼が特異の畫體の忽然として史上に顯はれて、其の由つて來る所を明にし難い今日にあつては、此の種の傳説も尙一顧の要がある。今はたゞ此の傳説の出典を明にし得ない。尙此の流系に加ふるに光悦として傳ふるものが爲めに斯く云ふのみ。 尙此の流系に加ふるに光悦として傳ふるもの少からず、土佐某々の作等頗る多い。

斯く觀じ來れば此の扇面散し屏風は現時の遺品より云へば漸く桃山期以上に上り難く、元久繪の如きは恐らく最古の一遺例とすべきであらう。たゞ是れを美術關係の文獻に顧みる時、既に倭錦に光信繪扇流し圖を録し、其他諸家の鑑定控書にも此の例を見ることは多い。無論是等の作今に傳存するか否かを明にせず、また其の果して正筆として足利中期のものと思すべきやも疑はるゝが、單に當代記録の上に求めるなら、扇屏風として録するもの、實隆公記大永六年十一月十三日の條に

向裏辻衛立障子色紙事北向所望之間談合、權中向花山云々、留守也、傾一盞歸、三亞相在此亭、扇畫圖被持來、源氏繪也神妙物共也、爲押屏風云々と云ひ、また同記大永五年の記に

帥六枚屏風押扇、甘入來十月三日

古扇□等所望申處二本斗各給之、爲押屏風也九月廿九日

等を見るべく、鹿苑日錄には稍溯りて、長享二年正月廿三日の條に

禪昌院扇屏風一雙來

と録し、明應八年十月六日の條には

扇面散屏風に就いて

福枝甲乙人所奪取者、常住鶴屏風一隻、扇之屏風一雙、杉雪屏風一隻、其餘天山具器、托子、文臺皆失矣云々

とあり、尙超えて同月八日九日等の條にも扇屏風の稱が見出される。こゝに扇屏風と云ふ。其の内容は果して扇紙を押せるか、或は扇形を繪けるものか、其の如何を明にし難いが、上記實隆公記の記事には當時屏風に押す爲めに畫扇を求めたることを傳へる。尙稍是れを溯れば蔭涼軒日錄文明十八年七月廿九日の條に是れを求め得べく、而も其の扇紙の六十枚の多數なるを傳ふること、既に予が宗達雜考末尾に附記せる如くで、元久繪の多數の畫扇を押せるもの、桃山期に遺例を見るも肯はれやう。而してまた若し是れを扇流しに求めんか、鹿苑日錄に

自大左有使、金屏扇流明日自御所御借天文五年閏十月三日

慈觀院金屏風貳雙來、妙蓮寺金屏一雙、扇流一雙來長享二年正月廿三日

あり、實隆公記には

依當番參内、於御前數刻御言談、賀茂社御法樂五十首續哥拜見之、又新調御屏風扇流拜見頗美麗有興文龜二年四月十七日

於常御所庇傾一盞、欲退出之處細川屏風平家繪扇流可一見之由被仰之文明十八年五月十日

抑源氏扇流畫屏風細川讚岐守新調物拜見、絕代之狀觀驚目者也延德元年十二月十三日

等の遺記を見るべく、看聞御記にも

屏風召寄一覽源氏繪扇流也、梅尾殿御筆勿論但以外古物也、仍不召留嘉吉三年九月廿二日

内裏御屏風一雙舊院御屏風申出了永享六年七月六日

等を求め得よう。

如上の諸記録は寡見の予がたま／＼時に觸れて涉獵し得たる當代の遺記で、尙此の種の文獻を傳ふるもの必ずしも少きにあらざるべく、そは一に世の博雅の示教に俟つもの、而も是等を以てして、尙斯く扇を主題として意匠を加へ、屏風繪を描き或は擬して器材を裝飾せることの古きに出づるを知るべきであらう。而して今是等の文獻を綜合して考ふるに、こゝに近世の此の種の遺品の源流を成せる二三の事實に逢着する。其の一は是等文獻の多くが金地屏風なりしを語ること、元久乃至宗達の屏風の明に先蹤を爲すもの、また畫扇に源氏繪等の多かつたことにも亦、近世に下つて其の様式をこそ異にしたれ、帝室御物或は原家藏品の宗達繪の源流を茲に見ることが出来る。而して南禪寺屏風の古畫扇を貼せる張交屏風に至つては、明に文獻の語るものは無いが、そは寧ろ簡略の記事のそれに及ばざりしを示すに過ぎず、前記實隆公記中、屏風に押す爲に扇子二本を賜へる如き、要するに古畫扇を貼用せる文獻であらう。尙最も興あるは同記の帥の六枚屏風を語るくだりに

甘於帥方屏風畫工事沙汰之大永五年十月四日

と云ひ、翌日其の終功せるを記せるなど、正しく近世の扇面屏風に、畫扇の新古に論なく、扇紙を貼して骨を描けるもの、少くとも大永以前に出づるを知るのである。

而して最後に残る問題は、斯く扇形をもてさま／＼に屏風に意匠せるもの多きがうちに、其の何れを果して原始的形體とすべきかで

あらう。既に如上の文獻の示す所を以て見れば、扇流の早く永享、嘉吉にありて、他の稍、時を下れるより、或は是れこそ原始的形體ならんかとも解しられるが、其處には寧ろ他の文獻の亡逸をも想像すべく、また或は扇流しが其の雅びたる意匠によつて、特に重貴されたるにも因するかも知れぬ。果して僧用集に云ふ

御座鋪に屏風立候事、墨繪可爲上、色繪みがきつけ下に立、組扇ながしは上也、みがきつけ殊に下也

と。此の本果して何時の撰か、續群書類從所收の末尾、寛文書寫の旨を傳ふるのみで明に推定し難いが、如何なる點より見るも足利以後の撰述と見ることは困難である。のみならず色繪みがきつけみがきつけの語、在來誰人の考をも聞くところが無かつたが、恐らく金地を意味するものなるべく、實隆公記に盤付の文字を當てる。こゝには金地濃彩屏風を指すもので、また此の種の作品に關する重要な一文獻であつたが、予が昨年十二月號の本誌に金地濃彩屏風の起源を考へながら、遂に此の文獻を逸したのは予の不明であつた。を下に立つるを規定せる如き、たとひそれが僧房精舎に於ける日用の記であるとしても、尙仄に足利中期を下らざる遺記であらうかと思はれる。而もそれにも應はしく墨繪屏風を上<sup>上</sup>に立て、是れに特に扇流しこしこに粗の一字、稍解するに苦しむ。大方の示教を俟つ。を配せる如き、其の由來の如何はあれ、當時此の圖様の重貴されたるは想像することが出来る。

そも／＼扇流し圖の起源に就いて、安齋隨筆の記すところ、既に屢、引用せられたるものながら

京都將軍のいづれの時か、嵯峨天龍寺御成の時に、童の持候扇子風にとられて、渡月橋より嵯峨川へ流れしを面白しとて、供奉の人々扇を流せしなり、其後五山の寺に又御成の時屏風に書きて立てしなり、是れより御成の儀式の様になりて、御成の時には必ず扇流屏風を立てられたり、古き屏風



に今も扇流しあるは是なり

とするものである。尙是れを外にして甚だしく傳説的色彩を加へたるものに長谷寺靈驗記の一挿話がある。村上天皇の御宇、高光の少將の出家遁世せるを、其の妻いたく是れを歎き、長谷寺に祈願しての歸るさ、泊瀬川に少將の扇の流れかゝりたるを見て、遁世の地を知るとして利生記の一章を綴りたる後

扇流と云ふ是れにてぞ侍りける。少將入道隨喜のあまり、此事を我が常の居所の障子に書て大悲をぞ貴みける云々

と云ふもの夫れである。無論荒唐の傳説、一顧の價值無しと云はゞ云ふべきも、却つて逆に此の傳説の綴られたる頃、扇流し圖の盛行せしを想像せしめるもの、而して其の述作の時や如何。今是れを明に推定することは難いが、恐らく古縁起を骨子として足利中期の頃に補記せるかと思はるゝ節多きを知るのみである。

此の荒唐の傳説に比しては上記安齋隨筆の記事には尙より多くの眞實性を讀むとも云ふべきか。例へば童の扇の風に散りたるも疑ふほどにも非ず、近侍のもの、是れに興じて競ふて清流に浮べたるも亦あり得べき一場の光景、而してこゝに京都將軍の時とのみ云ひて、明に其の年代を示さないが、若し當時既に扇形を屏風の意匠とすることがあつたとせば、水紋を畫いて此の話柄に應ずることまた一步の差、恐らく誰人が嘗て扇流しを繪いて機智を誇つたかも知れぬ。たゞ是れあるが爲めに此の圖様の屏風の、特に重貴せられて御成の際に必ず是れを立つるに至つたと云ふ理由を解することは出来ぬ。

扇面散屏風に就いて

想ふに邦俗の扇を愛すること、上代より最も盛んに、其の製に奇工を集めたるは文獻の無數に語るところ、今更に言ふまでも無いが、或は『丁字染の扇のもとて馴らし給へる移り香』源氏物語を懐しみ、或は女院入内の供奉に、白馬銀鞍の貴公子の、なよびかに扇をさし翳したる百鍊抄を故らに註記し、また紫式部日記には『扇どもをかしきを其の頃は人々の遊び』たるを録する。特に是れに様々の繪を畫きたるは、僅に今日に傳存した遺品にも知られ、其の名工の筆を煩はしたるは既に長秋記保延元年六月廿一日に繪師賴俊に仰せたるをも傳へる。斯の巧思を極むる所、歴代扇合の文獻ともなつたが、藤末の頃からか、音物として贈遣する風習の漸く多きに及びては、單に扇子を贈遣せるのみに止まらず、扇紙を贈れることまた無數に文獻の語るところ、此の事實こそ却つて扇の趣味の極盡を物語るもので、鎌倉以降漸次此の贈遣に賀禮の意味を加へたるも肯はれる。

斯く邦俗の扇をめてたしと見る好尚は、單に是れを屏風に貼し或は繪けるのみならず、寧ろそれに先んじて各種の器財染織等の文様として應用されたことを想像せしめる。たゞ不幸にして此の種の器財は自ら損潰し亡逸すること多く、僅に髹漆品に帝室博物館藏蒔繪扇面散手箱等を好個の遺品とするが、それも尙足利期の作に過ぎない。其の他陶瓷、染織等に此の文様を應用するものは甚だ多いが、自ら其れ等の徳川期以降の作なるはまた止むを得ない。然したゞ比較的損潰の危険を免がれ易い鏡鑑の類にあつては、今日尙多數の此の種の遺品を見ることを知るであらう。たとへば廣瀬都巽君の和鏡

聚英一部を披閱しても南北朝期に屬するものに扇面秋草双雀鏡同書正篇

下卷繪扇双鶴鏡同書續篇扇散双鶴鏡同書三等あり、尙溯りては扇面双雀長

方鏡同書正篇扇散飛雀鏡同書二等の鎌倉期の作品にも注意される。尙若

し弘く是等を求めるなら、多數の遺品があるであらうが既に斯く鏡

鑑の如き小部面の文様にも所謂扇散し文が應用されたるを思ふなら、

蒔繪等の文様にも此の多數が應用されたるを想像することは自ら當

然であらう。

既述の如く上代より以降、邦俗の扇に關する特殊なる好尚と、其

れに應じて各種の藝術作品に應用されたる跡を想像する時、此の扇

屏風の如きも或は上記の諸文獻が示す如く永享、嘉吉の交に初めて

試みられたものでなく、恐らく尙遙に上世に發祥せるもので無いか。

こゝにも明に是れを證する文獻を得ることは困難であるが、唯、明

月記寛喜二年六月廿一日の條に

十三日行幸、左右大將、具實、隆親、爲家、基清、光俊、實有、公長、親

長卿、實世朝臣、次將師季、實時、教房、氏通、右宗平、實蔭、隆盛、親

氏内侍所家定、教信、被置物屏風四帖六枚二皆以染物作之、一以護袋爲色

紙形、一押扇紙作泉形瀧落かねつくる筆村濃染物爲山云々

とあるが僅に思ひ出でられる。無論此の一例の如き要するに當代の

所謂風流屏風の一として、特殊なる一遺例を示すものではあるが、

而も此の記録は既に寛喜に溯るものである。若し時を降つて鎌倉末

期乃至南北朝に入るなら、此の種の風流屏風が漸く弘く行はれたか

を想像することも亦不可能では無い。殊に此の一例が扇紙を押し、

泉形を作り瀧を落すことを傳ふる如きに至つては正に宛然たる扇流  
しの屏風である。

如上の點を考慮するなら、一面に邦俗の好尚を思ひ併せて、此の

扇流しが決して突如として足利の頃、京都將軍の嵯峨御成に發祥し

たものであることは寧ろ疑ふべきに近い。のみならず、尙是れある

が爲めに、弘く扇屏風が、先づ扇流しに發して、扇散し其の他の是

れに次ぐものであらうとは解し難く、寧ろえならずも繪かれた扇紙

或は古畫扇の多數を、よしありて筐底深く藏したとすれば、後是れ

を屏風に押すことも亦あり得たであらう。扇屏風の發祥こそ即ちそ

れである。同時に世の好尚は尙一步を進めて扇を屏面に圖繪して扇

盡し圖の試みられたであらうことも略々想察に難くは無い。

予は以上に於て此の所謂扇散し屏風が恐らく足利に先んじて發祥

し、また斯く扇形を應用せる障屏の三四の意匠が、必ずしも何れを

先とすることも無く、自ら世の好尚に應じて作られたであらうこと

を考へた。而して色繪みがきつけにも増して此の種の屏風が重貴さ

れたことは遂に是れを證する由も無いが、此の雅麗の趣味好尚がま

た自らこゝに至らしめたことを想像する外は無い。事は屢々不用意

に成りて必然に了る。偶々嵯峨御成の一情景があつたとし、こゝに

機智を得た畫師が五山の僧房に此の屏風を繪いて將軍の入興を得た

ことがあつたとするなら、それも亦重貴の一因でもあつたであらう。

本論を了るに當つて一二を附記する。方今扇流し圖として遺存す

るもの、何れも當初より畫者の意匠として、扇面に扇形をも繪きた





扇面貼交屏風ノ内  
柳燕圖

四睡圖

京都  
入江波光氏藏





扇面貼交屏風ノ内  
虎溪三笑圖

松鳩圖

京都 入江波光氏藏



るもののみ、未だ古畫扇を貼用して水紋を加へたるものを見ないが、元來扇流しの原始的形體は或は扇紙を貼用するにてもありしか。嘉良喜隨筆に左の記事が見られる。

七夕に宮方へ天子より薄地の扇一本下さる。十本骨にて幅廣く折りて、成程結構な金泥に仙人や鶴や目出度物を書く也。今の扇流しに幅廣き扇あり、皆是にて有し也。幅の廣き扇の地紙の古法眼榮徳杯の類の筆の畫、今扇流しの屏風に押てあり、皆是薄地の扇なるべし

と。こゝに云ふ内よりの賜扇、乃至五月朔、吉例として將軍より拜領の扇の如きが、若し此の屏風に貼用さるゝものがあつたとせば、

入江氏藏扇貼面附屏  
風所押元久印(寸原)

同上 永徳印(寸原)

尙更に重貴の因ともなりしか。

尙本誌所載元久繪に關して説いて及ばざるものを云はゞ、既記の如く本屏風に貼用された多數の便面繪は其の各扇に摺疊の跡を見ざるより考へて、恐らく是等が本來屏風に貼用することを目的として繪かれたものと思はれる。たゞ屏風各扇に五葉を貼し、一雙を通じて六十葉のうち、永徳印を有する一葉を混することは、また恐らく元久繪の一葉を何の時から散逸して、此の永徳筆古畫扇を以て代へたものと解する外は無い。而して元久繪に就いては、此の畫師の作、

扇面散屏風に就いて

寡見にして曾て經眼するところ無く、單に其の様式よりしては正筆と否とを判定することは困難であるが、畫傳の零細の記事と、其の印記の體様甚だ宜しきとより見て是れを以て正跡と考へる外は無い。其の跡必ずしも史上に特筆すべきものとは考へ難いが、元信の一體を追ふて織豊期にまで盛行した狩野派の畫體、少くとも是れを一珍蹟と見ることは出來やう。而して此の屏風の箱蓋裏には「元信畫扇五十九永徳畫扇」<sup>松鳩</sup>一右六十枚押繪屏風一雙龍寶山中眞珠菴藏之寛政丙辰年六月以原在中子得之」の墨記がある。以て本屏風の曾て眞珠菴に傳來せしものなることを知る。又永徳の跡に就いては、其の印記は上杉家藏洛中洛外圖屏風、淨徳寺藏世界及日本圖屏風所押のものよりも遙に小に、却つて小倉家藏許由巢父圖、室町家藏伯叔圖のそれに類するが、何れとも小異がある。唯後の兩跡は恐らく永徳の正筆ならんかと解されながらも、其の印記に至つては後捺の偽印ならんかとする事、方今史家の通説となれるもの、而して此の扇面繪の印記の體様の、前者に比して遙に優れたることは、是れこそ前者の原印として、是れを後摸して漫りに押捺されたるに非ずやと思はるゝばかりである。殊に其畫、樹幹の點苔より針葉の手法に至るまで、許由巢父圖に極めて共通點多く、而も其の墨氣の滋潤なる、或は是れを永徳正筆の一に數ふことも大過なきに近からんか。唯如何にもあれ、見るが如き小品の而も古畫扇の一殘影、縦ひ畫匠の正筆なりとするも何れは草卒の作なるべく、予は寧ろたゞ注意すべき一遺品としてのみ是れを推すに止めたい。